

概念の抽象説がモデル化されるまで

17-18 世紀論理学史における抽象の系譜

木本周平(法政大学)
浅野将秀(神戸大学)
岡崎佑香(立命館大学)

エルンスト・カッシーラー『実体概念と関数概念』は第一章において、本書が概念形成の理念的モデルと位置づけるアイデアを哲学史的に素描している。それが関数的概念形成とされる考えであるが、その際に自らのアイデアと対照する仕方での概念についての伝統的な理解を批判する。ここで批判対象とされている考えを「概念の抽象説」と呼ぶことにする。概念の抽象説を可能な限り一般的に特徴づけるとすると、なんらかの多様な情報の中で共通するものを概念内容として残し、異なるものをそこから消去することによって、共通の性質によって特徴づけられる対象群に適用可能な普遍的な概念(もしくは「一般的」とか「共通の」概念とされることもある)を獲得する手続きのことである。「可能な限り一般的に」としたのは、この考えをもっとも典型的な仕方では表現しているのは誰のどの説明であるのかがそれほど明確ではないという事情がある。本発表で我々が辿るのは、この考えが徐々に教科書的な説明となるほどに整備されていく系譜である。

概念の抽象説に対する批判は実はカッシーラーのオリジナルというわけではない。その系譜は少なくともヘーゲルまで遡ることができるし、そればかりでなくトレンデレンブルク、ドロービッシュ、ボルツァーノ、ロツツェ、ボサンケといった人々の論理学著作中の議論のうちで多様な論点の元に認めることができる(論者によっては、カントもこの考えに批判的だったとすることもある)。これはつまり、概念の抽象説に対する批判が 19 世紀後半までにはどちらかという「よくある議論」となっていたことを意味しており、その批判対象となる概念の抽象説はこの頃までにはさらに紋切り型となっていたのではないかと推察を引き起こす。カッシーラーの概念形成論において批判的に提示されている論点は哲学史的な前提を多く含んだものであり、彼の議論はその歴史的な帰結として見ることはできる。ではこうした歴史的背景はどのように構成されていったのか。

さてこのような事情から、批判対象となっていた概念の抽象説のいわば震源地を探してみると、19 世紀の論理学者たちが批判していたのは結局誰だったのかがそれほど明瞭ではないことに気付かされる。この点に動機づけられて、概念の抽象説の起源に近いとされる論考を眺めると、そこで展開されているアイデアがそれほど理論化されておらず、粗削りなものであることに驚かされる。たとえば、アントワーヌ・アルノーとポール・ニコルによる『ポール・ロワイヤル論理学』は抽象についての考えをかなり詳細に述べており、その中でも「第三の抽象」と呼ばれる手続きによって一般観念(概念)が形成されるとされているが、その議論を詳細に検討してみると、それは後に批判対象となる抽象の理論と関連はするものの、全く同じのものであると評価することは難しい。また『ポール・ロワイヤル論理学』の記述を一部そのまま採用しているロックの『人間知性論』の議論もまたこの考えの起源の近くにいるはずだが、そこで提示される考えを体系的に理解するためにはかなり踏み込んだ解釈を要するものであり、ロック固有の哲学の枠組みの中に強固に組み込まれた主張になっている。両者は 18 世紀以降の抽象概念についての考えに大きな影響力を

持ったことは間違いないものの、その後には批判される概念の抽象説そのものとするには多少の留保をつけたいのである。

『ポール・ロワイヤル論理学』やロックの議論はなぜ概念の抽象説との同一視が難しいのだろうか。概念の抽象説に対する批判にしばしば見出されるのが、「内包と外延の反比例の法則」が成り立つとする考え方に対する批判である。内包とはある概念を本質的に特徴づける性質のことをいい、外延とはある概念の下位に属する概念のことをいう(なお、近世論理学で一般に見られるこの定義は現代の意味論において念頭に置かれる外延の定義とは異なっている)。両者が反比例するとは、内包量が増えることで外延量が減少し、その反対もまた成り立つという関係のことを指す。この考えに従えば、抽象のプロセスを通じてより普遍的な概念を獲得することができるが、その結果得られる概念は徐々に空疎になる。最高次に普遍的な概念(「存在」もしくは「或るもの」)まで達すると、それは最高度に空疎な概念となる。つまり、概念の抽象説がこの関係を法則的に捉えているのだとすれば、抽象とは概念内容が空疎になるだけの意味のないプロセスになるのではないかと批判されるのである。ところが、意外にも『ポール・ロワイヤル論理学』はこの関係が法則的に成り立つとは明示的には述べていない。むしろ、本書はこの関係に対する特殊な例外(外延がより限定されても、それと反比例して内包が増えることがないという事例)の存在を指摘している。多くの注釈者は例外の指摘を無視してこの関係に法則性を認めるという考えをアルノー達に帰属させている。我々もこの無視にはそれなりの正当性があることは認めるが、こうしたやや煩雑な文献上の事情が示しているように思われるのは、『ポール・ロワイヤル論理学』は概念の抽象説の端緒ではあるとは言えるものの、理論として整然とした体系とはなっていないのではないかとということである。

これに対して、18 世紀の後半までになると理論的状況はかなり整備されてくる。ドイツではマイヤーの論理学著作やカントの一般論理学には、理論化された抽象の考えをみてとることができる。またトマス・リードの『人間の知的能力に関する試論』にも同様のことが言える。19 世紀の論理学者が批判していた考えは、すくなくともドイツにおいてははいわゆる講壇論理学の展開を通じて徐々に形作られてきたというのが実情のようである。

本発表で我々はとりわけドイツにおけるこうした理論整備の過程をたどることで、この考えが教科書化され、また常識化されていく歴史をたどる。こうした歴史を提示するための我々の手法はどちらかと言えば記述的なものであり、哲学者相互の「影響関係」を実証的に論じるものではない。我々が影響関係を主題としているわけでないのは、それを積極的に論じることは難しいという理由もあるが、この考えがある時期以降にほとんど常識となっているという事実の方が重要な意味を持つためである。19 世紀の論理学者の多くはこの考えを批判する際に特定の対象を挙げることは少ない。これは当時の批判の慣習的スタイルによって部分的に説明が可能であろうが、名前を挙げるほどもないほどに普及した考えだったという説明もあろうように思われる。こうした説明の可能性を検討するためには、18 世紀後半から 19 世紀初頭までの時期における抽象に関する理論的状況を確認する必要がある。本発表で我々が目指すのはこの点に関する寄与である。